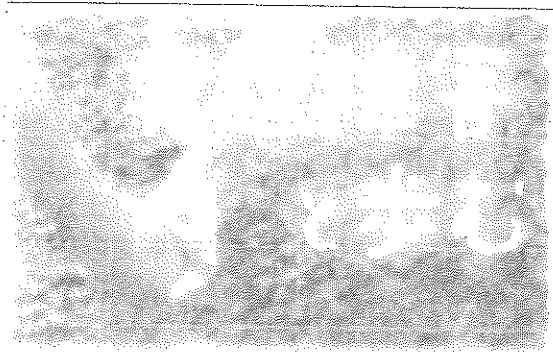


比内養護学校かつの分校生の保護者相談会・資料  
~~鹿角手をつなぐ親の会 あんず部会学習会 資料~~

## 「発達障害と歩む」



平成27年12月13日・こもっせ  
鹿角手をつなぐ親の会



言葉の発達が遅い。長崎望さん(33)＝大館市＝がそう思い始めたのは、長男碧空君(12)が2歳の時だった。犬を見れば同い年の子どもは「ワンワン、来た」「ワンワン、かわいい」といった2語文が話せるのに、まだ「ワンワン」としか言えなかった。言葉を覚えてほしくて、望さんは目に映るものの名前を教えた。バスに向かって「あつ、バス」と言いつつ、碧空君は「アバス」と覚えた。

保育園に通えば集団生活の中で多くの刺激を受け、言葉も発達するだろうと期待した。だが、今度は落ち着きのなさが目立ってきた。椅子に座っていられず、友達と一緒に歌ったり踊ったりできなかった。園から一人で逃げ出したこともあった。

「何でもお君は僕たちと同じことできないのー。いつもこうなんだよ」。碧空君の行動を不思議がる園児にそう言わ

# 理解されにくい息子

普通じゃない?

れた。悪気はない、と分かっていたても気持ち沈んだ。「園児にも分かるくらい、碧空は普通じゃない」

「買い物に行くよ、おもちゃを欲しがって暴れた。抱えてもなだめられず、靴は脱げ、スポンはざり落ちた。買い物客の視線が痛かった。おもちゃを手に取り、会計しないまま店を飛び出した碧空君。必死で追い掛ける望さんの後を、店員が追ってきた。

育て方が悪かった？ 妊娠中に悪いものでも食べた？ どこかに頭をぶつけた？ 育てにくい原因を考えだすと、きりがなかった。

碧空君は知的遅れのある発達障害の一種と診断

**発達障害** 学習障害(LD)、注意欠陥多動性障害(ADHD)、自閉症スペクトラム障害など脳機能の発達が関係する生まれつきの障害とされる。知的遅れを伴うこともある。障害ごとの特性が重なり合っている場合が多く、障害の種類を明確に分けて診断することは難しいとされている。年齢や環境によって目立つ症状も違い、時期によって診断名が異なることもある。

された。保育園に通いながら、対人関係などの発達を促すため市児童発達支援センターを利用した。言語聴覚士の指導も受け、少しずつ言葉を習得していったが「同い年の子たちに追いつくことはない」と言われた。障害を受け入れざるを得なかった。

小学校では特別支援学級を選んだ。言葉がたどたどしく、通常学級の友達の輪に入れずいた。年下の子からばかにされることもあった。それでも、4年生から習

現在、中学1年の碧空君の言語能力は6〜7歳。勉強では同じところを何十回も繰り返して覚えている。小学校と違って毎日制服を着て登校することや、教科ごとに先生が変わる環境にもようやく慣れてきた。ゆっくりと、マイペースで成長中。

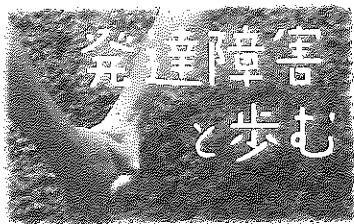
「出掛けよう」。望さんは碧空君の手を取り、買い物に行く。その手のぬくもりが今はうれしい。



手ぎひないで歩く望さんと碧空君。「育てにくい子」だと思える。でも、よくかわいさ

落ち着きがない、言葉の発達が遅れている、読み書きが極端に苦手…。発達障害の特性や程度は人によってさまざま、理解されにくい。当事者や家族の思い、支援する保育・教育現場などの取り組みを探る。

〈土田絵美子〉  
〈水曜日掲載〉



発達障害と診断されないまでも、言葉や行動の発達に何らかの特徴がある子どもも、集団生活になじめない子どももいる。保育現場はそんな「気になる子」の存在に早い段階で気付き、支援につながる重要な役割を果たす。

「友達をたいたり絵本を取り上げたりする子がいる。大人の注意を引きたいのかもしれない」「いつもここにしている人気者。でも集団での遊びのルールを把握できていない」

先月下旬、秋田市の県青少年交流センターで開かれた「『気になる子』の研修会」。市内の民間保育所の保育士ら約70人がグループ協議に参加し、特徴のある子どもの様子や寄り添い方を検討し合った。

話題は現場の悩みにも及んだ。単なる経験不足による未熟な発達障害による特性の区別の難しさ、保護者対応の難しさ…。その内容は深刻だ。「気になる子」のまき

# 支援の鍵は保育現場

## 気になる子



保護者にどう伝えるか。そこが一番デリケートなところ」と話すのは、ある保育所の園長(57)。子どもの発達を支援する専門機関への相談を勧めたくても、保護者に「うちの子はやんちゃですから」「それも個性」などと言われれば深入りはできない。言葉を選びすぎて意図が伝わらないこともあるという。

「発達障害かもしれない」と認めたくない保護者もいる。それ以上踏み込めば「保育所は自分の子に偏見を持っている」と思われ、信頼関係も崩れかねない。伝えたい、でも伝えきれない。そんな葛藤がある。

独自の取り組みをしている自治体もある。大館市では、2011年から臨床心理士や医師ら専門

**発達障害「の国産」**  
2012年の文部科学省調査では、全国の公立小中学校の通常学級に在籍する子どものうち「知的発達に遅れはないものの学習面または行動面で著しい困難を示す」とされた、発達障害の可能性

がある子どもの割合は約6・5%と推定されている。40人学級に2〜3人の割合。だが、その4割弱は学校で特別な支援を受けていない。発達障害と診断された子どもだけでなく「気になる子」も含まれている。

家の協力を得て5歳を迎えた園児の発達を把握している。市子ども課と市教育委員会が連携して毎月1回、有浦保育園で行っている発達相談「すてっぶ相談」だ。

臨床心理士や市内各園の発達支援コーディネーターが、会話や動作などの発達具合をチェック。医師の個別相談も受け付けている。配慮の必要な子どもには指導の工夫をし、集団に適応する力を

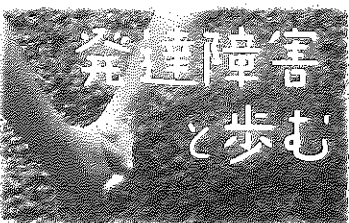
5歳児を対象にした大館市のすてっぶ相談  
同市の有浦保育園

「専門家による的確な見立てがあることで現場の保育士の理解が深まり、子どもへの配慮につながっている。保護者からの信頼感も高まる」。立ち上げから関わっている市教委教育研究所の山本多鶴子所長(54)は、こう話す。

5歳児を対象とした健診(発達相談)は全国的に広がっており、県内では本年度16市町村で実施している。大館市子ども課は「(3歳児までの)乳幼児健診では一人一人の成長や発達を診るのが主になる。5歳児になれば集団の中で人とどう関わり、どう気持ちの折り合いをつけていくかが見えついで」と5歳児健診の意義を語る。

「すてっぶ相談」は子どもが小学校での集団生活をスムーズに送られるよう促すのが狙い。同課は「就学1年前ともなれば保護者も子どもの発達をより意識する。不安に感じている保護者に寄り添いたい」としている。

(土田絵美子)

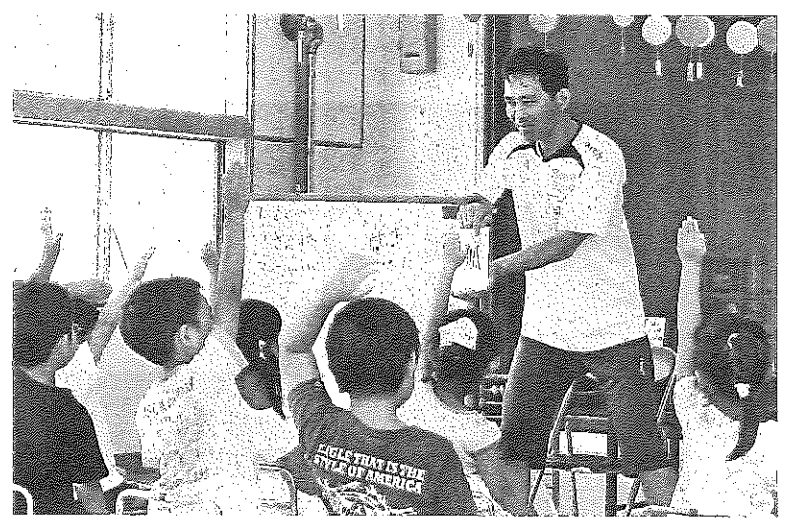


# 就学に向け情報共有

## 保育・教育の連携

「11月」の時間、間嶋教諭は漢字の読み方を課題した。動物の漢字とイラストを組み合わせたカードを次々と見せていくと、園児たちは「うま」「だぬき」「きつね」とピンポイントで答えていった。動物のカードに交じって、戦隊ヒーローが描かれたカードも登場。するとそれまで反応が薄かったある園児も、興味津々

「今日は小学校のお勉強をします。頑張ってください」「はいっー」先月上旬、大館市のある保育園で、来春小学校に入学する年長児10人を対象にした「公開授業」が行われた。授業をするのは、桂城小の教諭。自閉症スペクトラム障害など発達障害のある児童が在籍する特別支援学級の担任間嶋祐樹教諭(45)と、2年生の担任長田優貴教諭(28)だ。



間嶋教諭らが年長児を対象に行った公開授業＝大館市の保育園

の様子でカードに集中し始めた。みんなと一緒に活動するのが苦手で、支援を必要としている園児だ。間嶋教諭は保育士との事前の打ち合わせで、園児が戦隊ヒーロー好きであることを知っていた。「例えば、自閉症の子どもは人と一緒に何かすることが難しい。できる範囲で参加させたり、みんなと同じ場所にしながら違う形で取り組ませたりする工夫が必要」と話す。ほかに工夫はあった。授業の初め、これから習う「こへい」「さんすう」「たいいぐ」を順番にホワイトボードに記入させた。授業の残り時間が赤い領域で表示され、時間とともに減っていく時計も用意した。「何を」「いつまで」「次に何をするのか」という見通しを持たないために、行動することが苦手な子どももいるからだ。

公開授業はこの保育園が間嶋教諭に依頼した。集団の中で子どもを伸ばすとともに、発達に気になる子への関わり方を学ぶ狙いがあり、市内各園の保育士ら約20人も見学に訪れた。「支援を必要とする園児の特性などが小学校に伝わることで、スムーズな移行につながる」と園長(60)。就学を控えた園児に関する情報共有は、保育、教育双方の現場に欠かせない取り組みとなっている。ただ、園児たちの就学

先が複数の小学校に及ぶ場合もある。各園がそれぞれの小学校との連携を進めているが、対応に温度差もあり、常にうまく情報共有できているとは限らないのも実情だ。

この保育園は県立比内養護学校(大館市)とも連携。同校教員を定期的な招き、支援が必要とされる園児への寄り添い方についてアドバイスを受けている。

ある「こだわり行動」が見られる園児がいた。園にいる間ずっと、家から持ってきた白い綿を握ったままで、トイレに行くときや手を洗うときも離さずとじなかつた。

教員に相談すると「綿はお母さんの代わりなのでは」と返ってきた。保育士はそれを聞いて納得がいった。母親が迎えに来ると園児は綿を手放していたからだ。綿を握ることので安心して保育園にいられるのだそう、と察した。園の保育士全員で園児の行動を受け止め、見守ることにした。

園長は語る。「保育士からすれば『不思議だな』『困ったな』と思っ行動でも、子どもにとってはちゃんと意味がある。意味を探り、理解することで関わり方も見えてくる」(土田絵美子)



この夏、鳥海山麓にある花立牧場公園キャンプ場（由利本荘市矢島町）で1泊2日の「お泊まり会」が行われた。参加したのは、発達障害のある県内の10〜20代の子どもと親、秋大ボランティアサークルの学生、合わせて約40人。障害の特性からコミュニケーションが苦手な子どもたちも、ここではさまざまな人と関わり、思いっきり遊ぶ。

初日の午後。親たちが夕食のバーベキューを準備する間、子どもたちはスイカ割り 시작했다。一人ずつ自隠しをし、声援や指示を受けながら棒を振り下ろしていくが、なかなか命中しない。「何も言わないで!」順番が回ってきた小学6年の男児(11)が叫んだ。男児はゆっくとスイカに近づいていき、迷うことなく「振りは仕留めた。近くで見守っていた学生や他の子どもたちが

# 対人関係楽しみ、学ぶ

## 交流の場

ら歓声が上がると、満足げにガッツポーズで応えた。

男児は小学2年の時、コミュニケーション能力など基本的機能の発達がアンバランスな発達障害と診断された。人と関わるのが苦手で、5年生になるまで友達がいなかったという。

「クラスメートと関わるうとしても、からかわれる。見てるのがつらかった」と40代の母親。秋田市。同年代の子たちからは受け入れられにくいけれど、本人は関わりたくて仕方ない。ここでは、さまざまな年代の理解ある人たちに受け入れられる。息子の生き生きとした姿を見られるのが、うれしい。

デッキの手すりの上を歩く子、雨もお構いなしに駆け回る子、黙々とシ



「君、すごいな」。スイカを割った男児に歓声が上がった

**秋田LD・AD/HD親の会「V-net」** 発達障害のある子どもたちの親たちで1998年に結成した。毎月の定例会や夜話会などで子どもたちの特性や寄り添い方を相談し合っているほか、専門家を招いての勉強会を開いている。バーベキュー、クリスマス会などのイベントも実施。子どもたちと秋大ボランティアサークル「V-net」のメンバーが共に過ごす「かりんどう教室」も毎月行われている。

ヤボン玉を吹く子…。それぞれの遊びを、秋大ボランティアサークル「V-net」のメンバー7人がそばで見守った。

参加した子どもたちには、注意欠陥多動性障害(ADHD)や自閉症スペクトラムなどの発達障害がある。注意の持続が難しかったり、自分の気持ちを表現するのが苦手な対人関係やコミュニケーションに困難を抱えた子。お泊まり会はそんな子どもたちの楽しみ場にしようと、秋田LD・AD/HD親の会「V-

net」が開いている。バーベキュー、クリスマス会などのイベントも実施。子どもたちと秋大ボランティアサークル「V-net」のメンバーが共に過ごす「かりんどう教室」も毎月行われている。

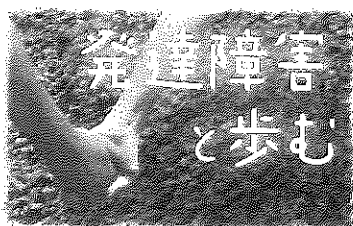
夜。日付が変わるまで学生らとかくれんぼしてはしゃぐ小学2年の女兒(7)がいた。知的遅れを伴う自閉症。人懐っこい性格で周囲との関わりも上手に見えるが、人の気持ちや行動を理解するのが苦手だという。

女兒の母親(46)は秋田市。「常に親が付き添ってはられないし、守られてばかりでも生きていけない。フォローしてくれる人たちの中で、人との関わりを学んでほしい」と話す。

学校では修学旅行など宿泊を含む行事がある。食事や入浴はできるか。友達とトラブルなく過ごせるか。親からすれば不安は尽きない。不安を軽減するために人との関わりをたくさん経験させたい、と母親は思う。失敗してもいい。何でも経験して、少しでも成功体験を積み重ねたい。

(土田絵美子)





発達障害の可能性がある子どもは、公立小中学校の通常学級1クラス(40人)に2、3人の割合でいるとされている。クラスの誰もが心地よく過ごすためには、子どもたち自身がさまざまな特性の人を受け入れることが第一歩。県立養護学校・天王みどり学園(漏上市)が、出前授業を通じて発達障害への理解を進めている。

「めあ こね こどいのなかでいきものはどいわ？」

船川一小(男鹿市)の6年生を対象とした出前授業。講師を務める同学園の教育専門監・加賀谷勝教諭(54)が、こう記された問題を出した。読み解く際のルールは「あ」と「め」、「こね」が「ね」と「ぬ」、「れ」と「わ」をそれぞれ置き換えること。

「まだ分からないんですか?」。加賀谷教諭は優しい口調ながらおえて、戸惑い子どもたちを

# 違いを認める心育む

## 出前授業

せかした。形の似た平仮名を瞬時に見分けるのが苦手、といった学習障害(LD)の特性を知り、その困難さを実感してもらったためだ。文字を置き換えて読むと「あめいぬ」とこのなかでいきものはどれ?」。

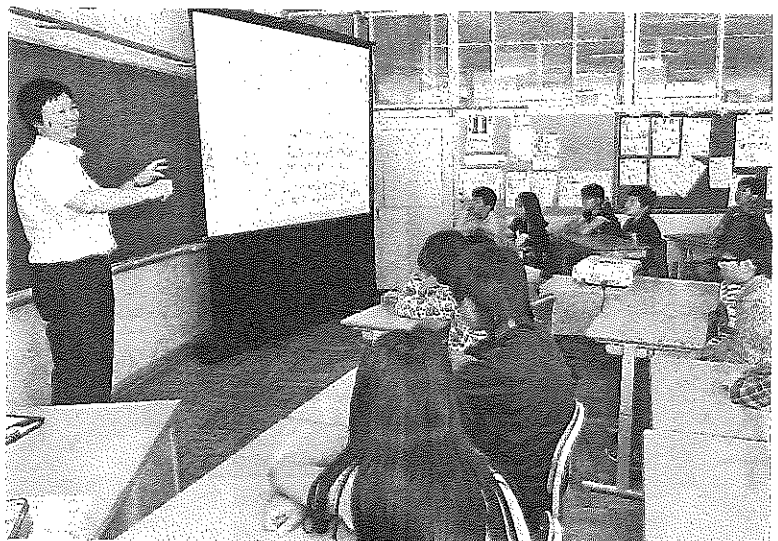
天王みどり学園は子どもたちの障害理解を進めようと、2013年度に出前授業をスタート。船川一小からは、同年度に特別支援学級が新設されたことをきっかけに毎年依頼を受けている。14年度までは低学年・高学年という大きなくりで実施していたが、本年度からは学年ごとに内容を交え、順序立てて理解できるようにした。

同小の子どもほとんど

どは、同じ保育所で過ごした。小学校でもクラス替えがない。桐生登志夫校長(58)は「共に過ごす時間が長い分、支援の必要な友達とも自然に同じ場で学校生活を送ることができている」と話す。

一方、大人の側に理解不足を感じることもあるという。学校が、支援した方が力を発揮できると感じる子どもは保護者に対し、特別支援学級を勧めたり、通常学級でサポートの補助を受けることを提案したりしても、世間体を理由に拒まれるケースがあるからだ。

「保護者や地域の人たちにも、少しでも障害を理解してもらいたい」と桐生校長。本年度は視覚障害を理解する3、4年生の出前授業に、保護者にも参加してもらった。



船川一小で行われた出前授業

た。今後は発達障害への理解を進めたい考えだ。

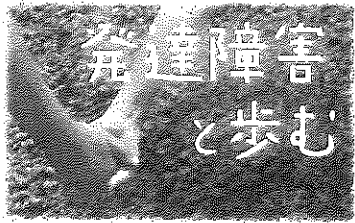
出前授業の終盤。加賀谷教諭は、ある中学校の体育で行われたソフトボールの様子を紹介した。集団での活動や運動の苦手な男子生徒が打席に入った時。投手は自らの判断で打席に近づき、緩い球を投げた。そのことに不満を言う生徒や、空振りを笑う生徒は一人もいなかった。男子生徒はバットにボールを当てることができた。男子生徒への特別なルールが、みんなにとって当然のルールになっていた。

「違いを認め合う心遣いや思いやりが生徒たちにあったからです」と加賀谷教諭。配慮が必要な子どもへの特別扱いを、当たり前と捉えることができる雰囲気づくりの大切さを伝えた。

授業を終え、子どもたちは何ができるかを考えた。佐藤さくらさん(11)は「文字がうまく書けない、読めない、という人がいると知って手助けしたいと思った。困っている人に気付き、声を掛け、動いていきたい」。目黒洗君(11)は「人によって物事の感じ方が違う、と理解することが大切だと思った」。

違いを認め、受け入れる心を育んでいる。

(土田絵美子)



湯沢南中学校(湯沢市)の一室に設けられた通級指導教室。1人の生徒と山元美和子教諭(52)が机に向かい合い、英単語の並べ替え問題を復習していた。

「あなたはバスで来ますか？」という問題。山元教諭が文節で区切っただけで、バスで、来ます』を覚えてみようか」生徒は英単語の意味を一つ一つ確認しながら書き並べた後、英文の冒頭に「D.O」を付け、質問の形にした。苦手な英語を順序立てて理解してもらおうと、山元教諭が提案したやり方だ。生徒は記憶の定着が難しいという特性がある。

通級指導教室では、読み書きや計算、対人関係が苦手な生徒が、通常学級に在籍していながら一対一または少人数で指導を受ける。難儀している度合いを考慮し、学

# 苦手克服へ特性考慮

## 通級指導教室

習回数が決められる。

湯沢南中の通級指導教室には湯沢・雄勝地域の中学校から16人が通う。担当の山元教諭は長く特別支援学校に勤務し、通級指導教室は通算7年目になる。

個々の学習に入る前に行うのが、集中力や記憶力などを高めるトレーニング。1こま50分のうち30分は費やしている。

図形の区別や、ランダムに並んだ数字を小さい順に並べ替えるなどのメニューがあり、制限時間内に達成できた数を表に貼り付けていく。自身の記録更新を目指したり、他の生徒と競争したり。

「集中力が高まれば学力もついてくる。絡まった糸がほどけるように力を発揮する生徒もいる。生徒たちは伸びしろがいっぱい」と山元教諭。通級指導は「連携による教育」とも言われるほど、生徒が在籍する学級の担任らとの情報共有が欠かせない。学習のどの部分でつまっていたのか、

なぜ難儀したのか、どんな支援が効果的だったか。在籍学級ではこうした情報を基に、生徒が力を発揮できるよう指導することが大切だ。

ただ、通級指導教室で理解・体得したことが、在籍学級の集団に入るとできないことも多いという。このため、山元教諭は「『分からない』で終わらず、辞書で調べるとか人に聞くとか、苦手なことを克服するための手だてを身に付けてもらいたい」と考える。

ある男子生徒(3年)は通級指導教室で自信が付き、学習意欲も高まっている。

読み書きが苦手な1年生のころは漢字やアルファベットを覚えるのにつまっていた。何度書いても

21人。学習障害(LD)や注意欠陥多動性障害(ADHD)などを対象とする教室は小中学校に計23あり、307人が対象となっている。

練習しても覚えられず、「僕はやらない」「やったって無駄だ」と主張していた。できないのならどうするか、山元教諭と一緒に考え、実践した。週1、2回、見る力や聞く力を伸ばすトレーニングを積み重ねた。英文の構成を覚えるため、山元教諭が作った単語カードを活用。分からないことがあれば、周囲に助けを求めめることの大切さも理解した。

在籍学級では、字が小さい教科書やプリントは拡大コピーしてもらった。初めは担任から配られていたが、次第に自ら「拡大してください」と求めるようになった。

母親(40)は分からないことが分かることはいいことだと伝え、励ましてきた。男子生徒は「通級は僕に合うやり方を教えてくれるので、勉強が分かりますようになった。やればできるんだ、やった分だけ返ってくるんだ、と思う」。

この夏の高校体験入学で、強く興味を抱いた学校があった。受験に向けることができるを精いっぱいやるつもりだ。

生徒たちのトレーニングの達成状況を示した表

(土田絵美子)



発達障害は国内で注目され始めた1990年代以降、広く学校現場に浸透しつつある。だが小学校、中学校、高校では理解の度合いに差があるとされている。

理解が進んでいるとされるのは小学校。学級担任制で一人の教員が学習から生活までを全般的にみるため、児童の抱える困難に気付きやすいという。一方、中学と高校は教科担任制のため、生徒の一日の様子を把握することが比較的難しい。

さらに高校は義務教育と違って、生徒が自らの意志で学ぶという前提がある。県内の教育関係者は「もちろん高校にも理解のある教員は多い。ただ、『高校受験を経て入学した生徒に支援が必要なのか』『特別支援学校で支援を受けた方がいいのでは』という考えの教員もあり、意識の差は大きい」と指摘する。

支援体制の整備状況も違う。学校と、保護者や

# さらなる意識向上へ

## 高校教員

外部の教育・就労支援機関の連絡調整を担う「特別支援教育コーディネーター」は全小中高に配置されているが、外部機関の活用状況は小学校が9割超、中学校が7割超となっているのに対し、高校は4割に満たない(2014年11月現在、県教育庁特別支援教育課調べ)。

現場では、教員を対象に発達障害の理解を深めるための研修会が行われている。支援を必要とする生徒や学校に対応しようと県教育委員会が取り組んでいる「高校特別支援隊」の活動の一環だ。

先月中旬に秋田北鷹高(北秋田市)で行われた研修会には、県北地区の高校教員ら約80人が参加した。講師を務めたのは、本県でスクールカウンセ

013年度にスタート。メンバーは特別支援学校教員、障害者就業・生活支援センター職員、発達障害者支援センター職員ら。事務局を務める県内

ラーの経験がある弘前医療福祉大保健学部の小玉有子教授(臨床心理学)。生徒の困難や支援例を紹介し、学校が核となって外部機関と連携することが重要と訴えた。

参加者には、支援を必要とする生徒に日頃対応している教員もいた。ある女性教諭(40)は「発達障害のことは知っていても専門家ではないので、やはり外部からの支援が必要。もっと積極的に学校から外部機関へ相談したい」と話す。

「指導の対象か、支援の対象かを見極めるのが難しい」と話す男性教諭(38)も。いわゆる「やん

の3特別支援学校が、各高校から「生徒の学習・行動上の支援」や「研修会開催」などの依頼を受け付けている。昨年度は31校から延べ140回の依頼があった。

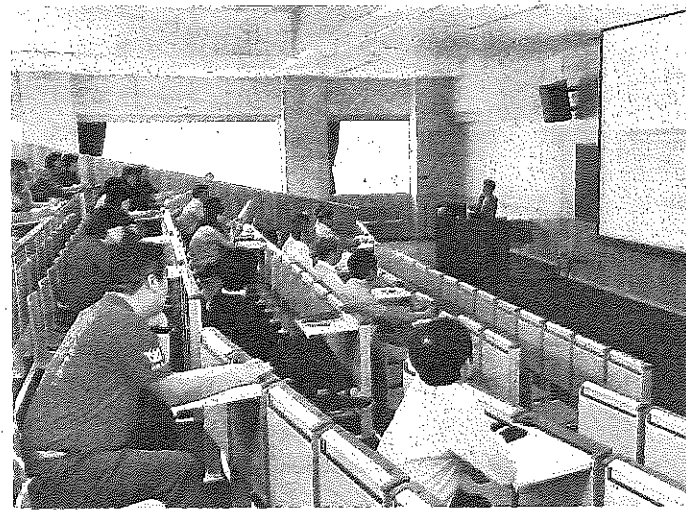
ちゃんな生徒と、本当に支援の必要な生徒の線引きに頭を抱えていた。今回、生徒の行動の背景に何かあるのかを理解する必要を実感したという。

研修会の内容は、主催する県立比内養護学校たかのす分校(北秋田市)が、参加教員から事前に学びたい点を聞いて設定した。質疑応答では具体的な支援策などが話題に上り、教員の熱心さをうかがわせた。

同分校の磯崎清和副校長(55)は「かつては教員が『困った子』としていたケースも『困っている子』という意識に変わってきている。ちょっとした発達のアンバランスは誰にでもあるという認識も広がりつつある」と話す。

県教育庁特別支援教育課は「特別支援教育は、特別支援学校だけに聞かれることではない」と指摘。「さらに多くの教員に関心を持ってもらい、必要に応じて支援隊を利用してもらおうサイクルをつくってきたい」としている。

(土田絵美子)



県北地区の高校教員ら約80人が参加した研修会＝北秋田市の秋田北鷹高



## 障害児教育

回答者

元特別支援学級担任

中野健太郎さん

Q 私は10年前に離婚し2人の子どもを育ててきました。

高1の娘は軽度の知的障害があり、特別支援学校に通っています。最近高3の息子が「みっともないアホ」「もっと勉強しろ。運動しろ」と娘を怒鳴りつけるようになりました。「昔は優しいお兄ちゃんだったのに」と戸惑っています。

A ご家庭での様子を詳しく教えてください。

Q 娘は肥満気味なの

ですが、あまり運動しません。帰宅後はテレビの前でゴロゴロしていることが多いです。

息子は大学進学を目指しています。最近「やせるために腹筋でもしろ」「もっと頑張れ」と怒鳴り散らすので、娘は

乱暴ですが、妹に「もっとしっかりしてほしい」と伝えたいのでしょうか。

また、妹が障害を持っていることで「友だちに知られたくない」「世話を一生しなくてはいけないのか」などと悩んでいると思います。何か言っ

### 特別支援学校に通う妹を 高3の兄が怒鳴り戸惑う

「お兄ちゃんは怖い。嫌い」と泣いています。

A おそらく、息子さんは受験勉強や進路などに悩んでいるのに、妹がだらしない様子に見えていら立ちを感じていると思います。親の苦勞を知っているだけに、表現は

ていませんでしたか。

Q 息子は何も話してくれません。今までは問題ありませんでしたが。

A 2人とも高校生です。将来について考えたり、いろいろと試行錯誤したりする時期です。特に息子さんは、妹の

進路や親亡き後の問題、自分の将来や結婚など、不安をたくさん抱えていると思います。じっくり話を聞いてあげてください。将来については「妹は就職するし、福祉や年金制度もある。そんなに心配しなくて大丈夫だ」と伝えましょう。

あなたとの話し合いで不安を軽減できれば、家族の信頼関係が深まると思います。兄妹の関係も改善するでしょう。

娘さんは、放課後等デイサービスに通うなどして充実した時間が過ごせるといいですね。家族3人がそれぞれ自分らしい生活を送れるように、環境を整えていければと思います。(15・10・11)